

我が国におけるカヌースラローム競技の現状と課題

Situation and problems on canoe slalom in Japanese society

1K07A135-5 竹下 百合子

指導教員 主査 岡田 純一 先生 副査 菊地 真也 先生

I 緒言

日本においてカヌースラローム競技は、これまでに 5 大会のオリンピック出場を果たしている。2008 年の北京オリンピックでは、カヌースラローム史上初の全種目へのエントリーを実現し、女子カヤックシングルにおいては 4 位入賞を果たすなど、日本の競技レベルは徐々に世界のレベルに近づいてきたと言える。しかしながら選手を取り巻いている環境は、全く逆の状況にある。今後さらに日本のカヌースラロームのレベルを向上させるためには、指導者、競技環境など解決しなければならない問題と考えられる。

本研究では、日本におけるカヌースラローム競技に関する過去の戦歴、競技環境などの国際比較を通じ、今後の課題を明確にすることを目的とした。

II カヌーの歴史

最も古いカヌーは、6 千年ほど前に発見されている。スポーツとしてのカヌーは、19 世紀中ごろイギリスを中心としたヨーロッパで普及していった。日本には 1938 年に、第 12 回東京オリンピックの開催と強化のため、日本カヌー協会が発足し活動を始めたが、第 2 次世界大戦の激化に伴って中断した。その後 1951 年に再加盟し 1960 年に再び日本カヌー連盟が復活した。

III カヌー競技

カヌー競技の種類はいくつかあり、その中でもカヌースラローム、カヌースプリント競技が、オリンピック種目となっている。それ以外にも世界選手権大会、日本選手権大会が開催されている競技もある。カヌーは競技としてだけでなく、レクリエーションカヌーとしても広く愛好されている。今後ますますカヌーは普及、発展していく可能性がある。

IV 日本カヌースラローム競技の現状

過去に出場した日本選手のオリンピックの成績を分析した結果、日本の競技レベルは徐々に世界のレベルに近づいて

きた。2009 年度に改正した ICF カヌースラローム競技ルールが、日本選手に与えた影響も明らかになり、今後も影響していくことがわかった。

V 他国との分析

今後日本の最大のライバルと言われる中国と日本を比較し、指導者および競技環境で大きく差が生じていることが明らかになった。また国際大会において、開催国の決勝進出者の数は、他国と比較しても人数が多いことがわかった。各国の国際的競技水準は、過去 10 年間あまり変化が見られなかったため、今後も拮抗する方向へ向かうこと、金メダルの獲得に関しては、幾つかの国が独占する方向に向かうことなどの可能性がわかった。

VI 日本カヌースラローム競技の課題

国内ではコーチの不在、国内の練習や試合環境が不備であるのが現状である。国内では練習環境が不備のため、より良い環境を求めて、海外へ個人的に遠征に行く選手もいる。しかし日本において、競技を続けるための環境が整備されていないという現状があり、自分の生活を犠牲にしながら競技を続けている選手が多いのが現状である。今後は選手が競技だけに専念できる環境を作ることが必要になってくる。

VII 結論

日本におけるカヌースラロームの競技環境に問題があり、特に人工コースの重要性が明らかになった。年間を通して練習が可能である環境を確保すること。海外の人工コースを模倣したコースを設置することで、選手が日本国内にいる期間においても人工コースに対応できる技術を習得することができる。

これらの問題を解決することは、日本のカヌースラローム競技のレベルの向上に繋がるだろう。また、選手が海外の人工コースで練習および指導を受けられるように、費用面や時間面での競技環境を整備する必要があることがわかった。